

質疑応答

岡田氏の講演の後、佐藤雅彦氏、事務局の松原を加え、三人による対談方式の意見交換を行った。

佐藤：51歳の時、アルツハイマー型認知症と診断された。仕事に支障をきたしはじめたのは、さらにその5年前。最初はシステムエンジニアをしていたが、最終的には配送係になり、都庁に行ったとき出口がわからなくなったことが決定打となった。

岡田：著書『認知症になった私が伝えたいこと』で、一番言いたかったことは何か？

佐藤：認知症になっても人生を諦めない、ということ。認知症になってできないこともたくさんあるが、できることもたくさんある。個人によっても状態が違うため、「できない」と最初から決めつけず、まず本人に聞いてみるということが大切。体調や状況にもよるので、一度できなかったからといって「あれもこれもできない」と決めつけてしまうと、本当にできなくなるので、励ましの言葉を掛けることが必要。

岡田：交通についてはどうか。

佐藤：電車を利用する場合、途中の駅がわからなくなるので、何分くらいで着くのか調べて、タイマーをかけて乗降する。また、バスを利用する場合、道路事情により時間が変わるので、アナウンスを聞き漏らさないようにしている。予防策として、乗車時に乗務員に降車するバス停を伝え、「私は認知症で、援助が必要」というカードを提示する。

岡田：移動経路はどのように決めるのか？

佐藤：短時間での経路を選択しているが、乗換が難しいときは遠回りをする場合もある。

岡田：日本の電車のよいところは？

佐藤：ICカードが使えること。料金を調べなくても良い。

岡田：駅で改善すべき点はあるか。

佐藤：矢印などの案内が欲しい。例えば、永田町は複雑で行く方向がわからない。

岡田：遠方に出かけるときはどうしているのか？

佐藤：飛行機ではなく新幹線を利用する。ただし、家族が心配するといけな

いので、乗るときに必ず乗車した旨をメールする。

松 原：飛行機を利用しない理由は？

佐 藤：飛行機は荷物を預ける段階から、どこに行けばいいのかわからない。

質問者①：自転車は利用するか？

佐 藤：信号を見落とすと危ないので利用しない。認知症は色々な情報の中から無意識に必要な情報を的確に選び取るのが難しい。

質問者①：歩行時の信号は問題ないのか？

佐 藤：歩行時は他のことを考えず、信号があることだけを意識する。

質問者②：カードはご自身の工夫か？

佐 藤：カードは、イギリスでの取組みを参考にした。

質問者③：私自身は視覚障害者だが、交通機関の利用の仕方について共通点を感じた。唯一違うと感じたのが、視覚障害者の場合、白杖を持っているので、駅員が案内をしてくれる。また、ガイドヘルパーなどの制度やサービスがあるが、認知症者に対してはそのような制度やサービスはあるのか？

佐 藤：ない。ちなみに、認知症といっても、レビー小体型は地理感覚がはっきりしているため場所はわかるが、アルツハイマー型は場所がわからない。同じ認知症でも特徴がまったく違うことは知られていないので、普及が必要。

岡 田：補足すると、アルツハイマーは認知症の原因のひとつで、認知症とは「生活に少し不自由さを感じている状態」を表す言葉。レビー小体型認知症には、幻視の症状がある。向精神薬を間違えて投与されているケースもあり、薬の影響においてもアルツハイマー型認知症とは異なっている。また、疲れやすい、混乱しやすい等の症状も違う。

佐 藤：さらに同じ病名でも生活履歴や脳の損傷具合で症状が違う。

岡 田：認知症は社会としての偏見があるだけでなく、自分自身の中にも偏見があり、それら二重の偏見があるため、認知症について聞かないように見ないようにしてしまい、それが自然に手助けできることを阻害していると考えられる。

質問者④：新幹線の指定席の券などをなくさないようにするための工夫はあるのか？

佐 藤：バックの決まった場所に入れて何度も確認する。買い物は、買い忘れがあるといけないので「買い物リスト」を作成しているが、同じものを買うといけないので「買ってはいけないものリスト」も作成してい

る。また、メモは紛失することも考えられるので、携帯電話のメモ機能も使っている。

質問者⑤：バスの利用で困っていることはあるのか。

佐藤：バスは道路事情により時間通りに発着しないことがあるので、降りるバス停には注意していなければいけない。特に、混み合っている場合は車内の停留所表示が見えないので困る。

質問者⑥：バス車中に降車停留所を表示するディスプレイの数を増やせば見やすくわかりやすいのではないか。また、停留所の名前が急に表示されると慌ててしまうことがあるので。電車のように路線のどこを走っているのかを表示したり、前後の駅（バス停）を表示することで、利用者は事前に準備ができ、降車がスムーズになるのではないか。

情報提供者：ストラスブールの連節バスには表示するシステムがある。

質問者⑦：日本でも、お台場のケイエムバス、港区のちいばすなど、いくつかのバス会社は車内の前方と中程にモニターがあり、後ろの人にも見やすいようバス停名を表示している。

佐藤：認知症は情報を判断することが難しいので、ハード面だけでなく、声を掛けてくれるなどのソフト面での対応もしてほしい。

松原：認知症者の抱えている問題は特異な問題ではなく高齢者、健常者にもあてはまる問題である。降りる駅がわからない、バス停がわからない、駅構造がわからないなど、全く同じ課題を持っていることがわかった。

岡田：駅構造も変わるので、自分のイメージと違っていて乗り降りを間違えてしまうことは認知症者に限らず誰にでもある。一方で、認知症は、すべてが一気に変化してしまうのではなく、少しずつ状態が変わっていくので、制度規定がしにくい部分がある。認知症のどの段階からどのように対応するのかについては専門家にこれから取り組んでいただきたい。

佐藤：認知症といっても色々な種類があるため個別対応が大切である。

岡田：認知症は自分事になりやすい。認知症最大のリスクファクターは年齢。年齢が上がらない人はいないので、認知症のことを考えること自体が社会を良くすることである。また、企業にとってはサービスを良くすることにつながるのではないか。